

『学生相談から見た学修支援 ～窓口として／目的として～』

=2016年度第3回 千葉大学

アカデミック・リンク・セミナー／ALPSセミナー

平成28年9月12日(月)

@千葉大学人文社会科学系総合研究棟2階

マルチメディア会議室

話題提供:東京工業大学(カウンセラー)

齋藤憲司

本日は貴重な機会をありがとうございます。

～学生相談／カウンセラーとしての経験をもとに～

I. 学生相談の目的と「学生相談モデル」

～使命、歴史、実際の相談内容 etc

II. 教育システムと「学生生活サイクル」

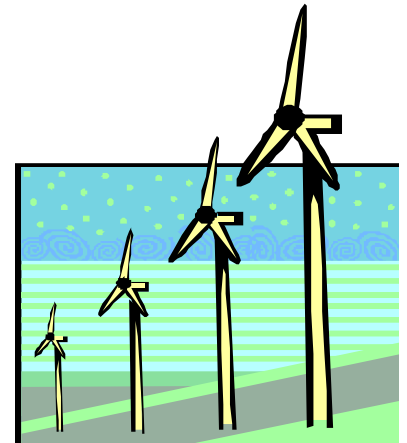
～“教育の一環としての学生相談”

III. 「学生相談」と「学修支援」

～窓口として／目的として(大学への貢献)

Yes, my ■ ■

このキャンパスが
ホームグラウンド！



((新入生オリエンテーションでのメッセージ))

I . 学生相談の目的と「学生相談モデル」



I -① 学生相談機関の使命

I -② 千葉大学における学生相談活動

(参考)個別カウンセリングの構造とプロセス

I -③. 学生支援・学生相談の歴史から

I -④ 「理念」の再構築＝「学生相談モデル」へ

I. 学生相談の目的と「学生相談モデル」

< I-①: 学生相談機関の使命 >

“学業・進路・学生生活・性格・対人関係等に関する学生の悩みや困難に対して、カウンセリングを中心とした専門的な適応支援・教育支援を行い、学生の心理社会的成長・発達・回復を促進することである。”

“相談・援助活動を通して見えてくる大学として取り組むべき課題について、大学構成員全体で共有し、大学執行部に対して必要な提案あるいは提言を行う。”

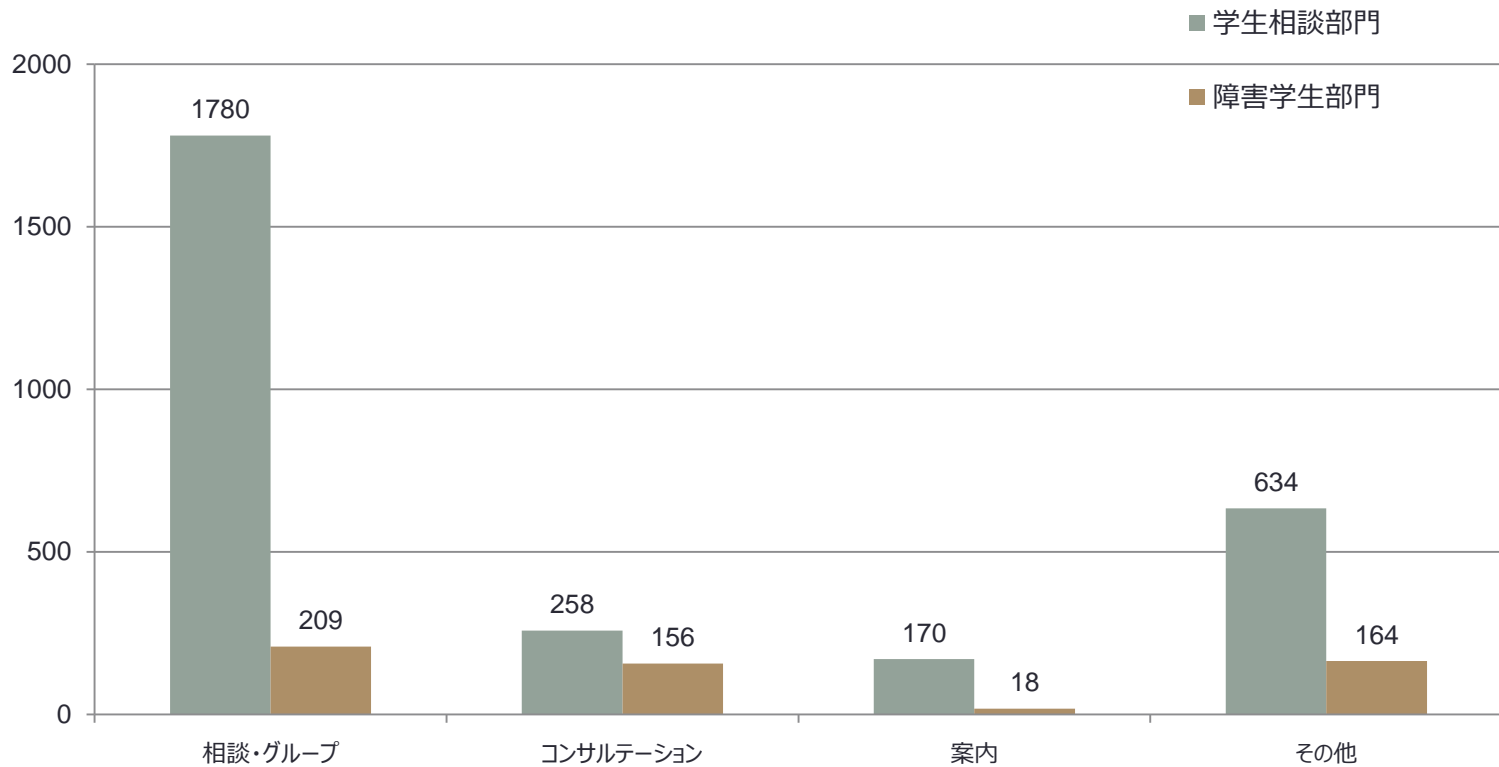
((独) 日本学生支援機構,2007)

“高等教育機関の教育的使命の達成”のために、“固有の専門性とさまざまな方法で・・・”担っていく。

(日本学生相談学会,2013)

< I ー②千葉大学における相談活動(1) > =年間利用件数=

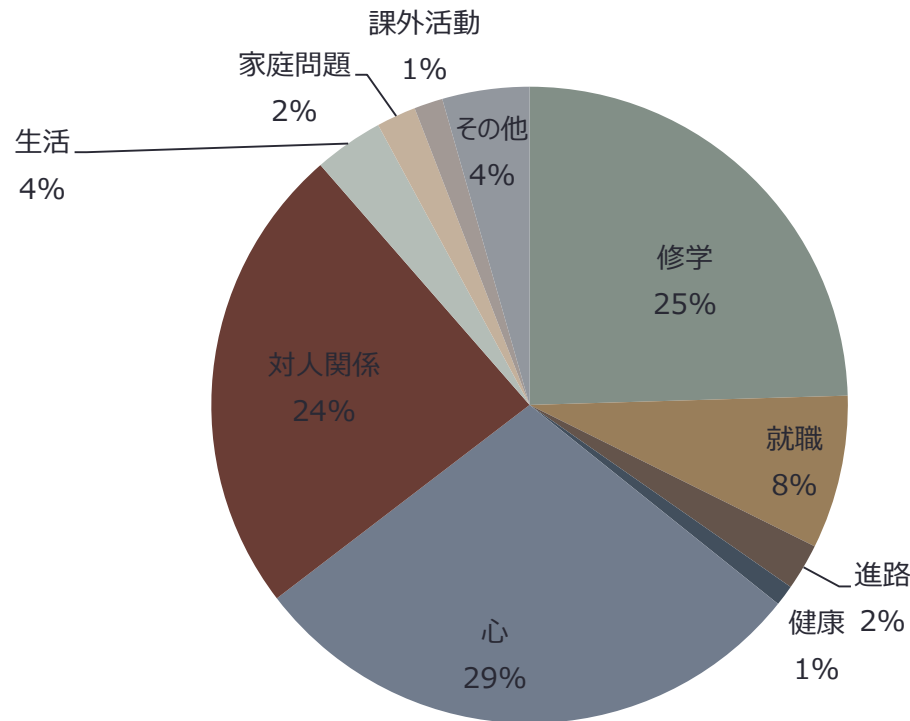
H27年度 年間利用件数 (西千葉キャンパス)



→丁寧な個別の対話／教職員、親・家族からも。

< I -② 千葉大学における相談活動(2) > =相談内容=

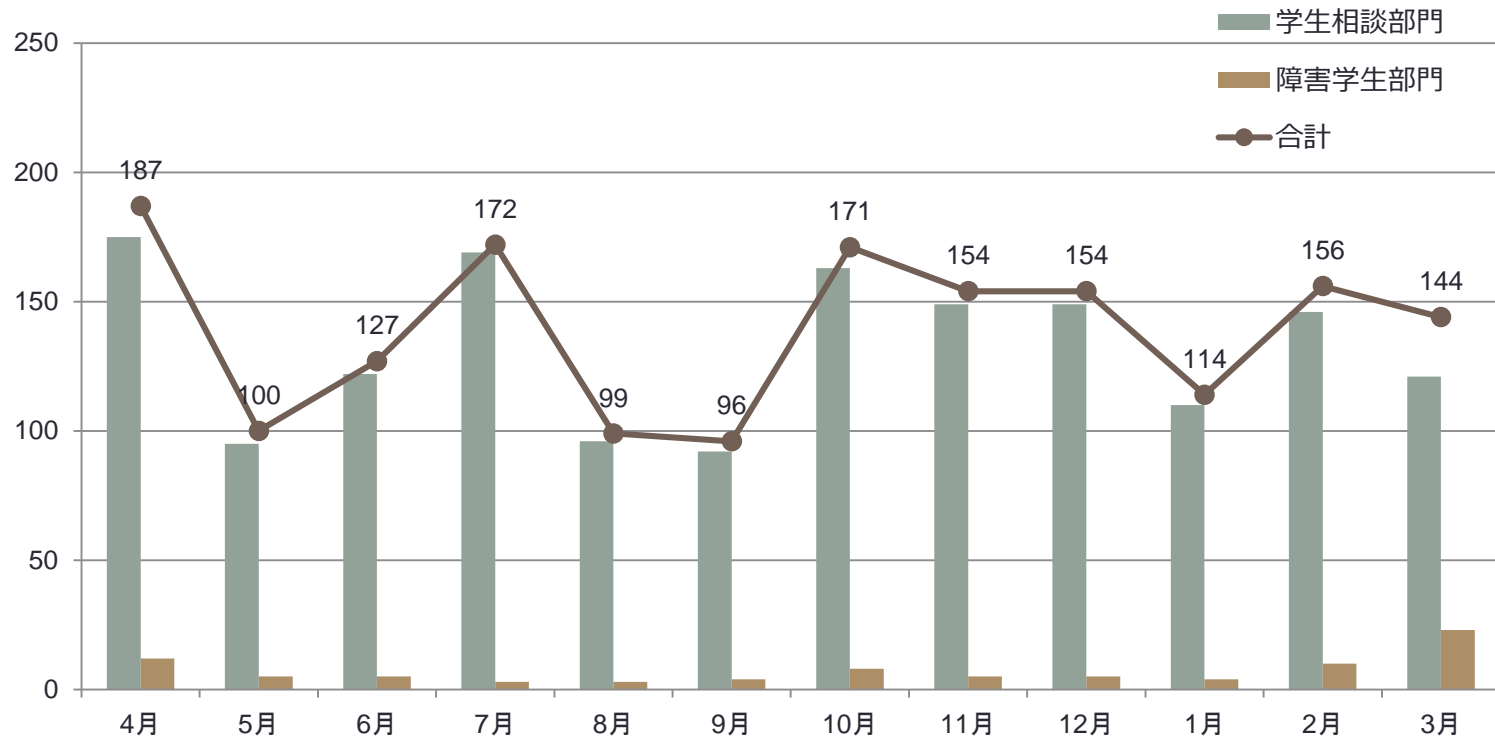
H27年度 相談内容内訳 (西千葉キャンパス)



→ 「修学」は大きな窓口のひとつ

< I -② 千葉大学における相談活動(3) > = 月別相談件数 =

H27年度 月別相談件数 (西千葉キャンパス)



→ 学生の来談は授業日程や修学状況と連動する

* (参考) ~個別カウンセリングの構造とプロセス~

【相談構造】

- * 料金無料、保険等は関与しない。本学の学生 (& 関係者) はどなたでも
- * 回数制限特になし、ニーズと状態像に合わせて。1回あたり30分~50分。
- * 学生相談の柔構造を活かすシステムとスタイル~個人として/チームとして
-

【相談のプロセス】

- 1) 短期集中 ~ 環境の変化・青年期の課題に直面して(1~数回の面接)
- 2) 長期継続 ~ 大きな心理的課題or心身の障害を抱えている場合
 (10~数十回、数年継続することも/cf.発達障害の概念が普及)
- 3) 定点観測的 ~ 自身の成長を確認する試み(毎年決まった時期に来談)
- 4) 断続的・五月雨的 ~ 障壁にぶつかるたびに・駆け込み寺的に(不定期)
- 5) ワンポイント面談(教職員)~学生の状態像/自身の関わり方について

< I -③. 学生支援・学生相談の歴史から(1)>

* 戦前の大学＝ドイツの大学制度をモデルとして設立
～国家をリードするエリートを育成する

(学生は一人前のおとなである)

* 戦後の大学＝アメリカの大学理念が急速に混入
～民衆の教育を受ける権利に応じて

(学生はまだ発展途上で支援が必要)

(参考) 「SPS (Student Personnel Service)」(厚生補導⇒学生支援)

～学生の個性に合わせて、正課外でも、教員、事務職員、
専門職それぞれの立場から、学生を育てる～

⇔ 理念の混在、徐々に”面倒見の良い大学”へ

cf. エリート型(進学率～15%以下)

⇒ マス型(15～50%) ⇒ ユニバーサル型(50%～)

< I -③ 学生支援・学生相談の歴史から(2) >

- * 1951年 アメリカより使節団、厚生補導研究集会
- * 1953年 最初の学生相談所設置(東京大・山口大)
- * 1955年 日本学生相談学会の前身設立
- * 1957年 学徒厚生審議会答申(文部大臣諮問)
- (* 1950'~1960' 全国に理念と気運が広まっていく)
- * 1966年 国立大学に保健管理センター設置開始
- (* 1970前後 大学紛争等で、学生管理>支援)
- (* 1970'~1990' 地道な実践もやや停滞期)
- * 2000年「大学における学生生活の充実方策について」
(廣中レポート) ⇨「教員中心」の大学から「学生中心」の大学
へ
- (* 2000'~ 学生支援・学生相談の再興期、様々な活動)

I -④「理念」の再構築＝「学生相談モデル」へ

* 実践と研究の循環から、今日的状況にも見合ったモデルを
(別紙資料A)

* 「学生相談の活動領域」 (齋藤et.al,1996)

＝学生支援システムの配列状況

⇐ アメリカの大学との比較から考えたこと

⇒ 大学にとって必須の機能とは何か

* 「学生相談モデル」の構築に向けて (齋藤,1999)

＝ 統合的なあり方をめざして／連携・協働の基礎として

⇐ 専門家&構成員の貢献と機能

⇒ ひとりの学生のために／教育目標の達成

Ⅱ. 教育システムと「学生生活サイクル」 ～“教育の一環としての学生相談”

Ⅱ-① 教育システムと連働する学生相談

Ⅱ-② 「学生生活サイクル」とその時代的変遷

(参考)「研究生活サイクル」と学生相談

Ⅱ-③. 「学びのシステム」と学生相談



Ⅱ-① 教育システムと連働する学生相談

* 3つの大学での実践から、教育システムと学生の適応上の課題を再考

(別紙資料B)

* 「各大学における教育システム」 (齋藤,1999)

= 1) 私立文系大学

2) 国立総合大学

3) 国立理工系大学

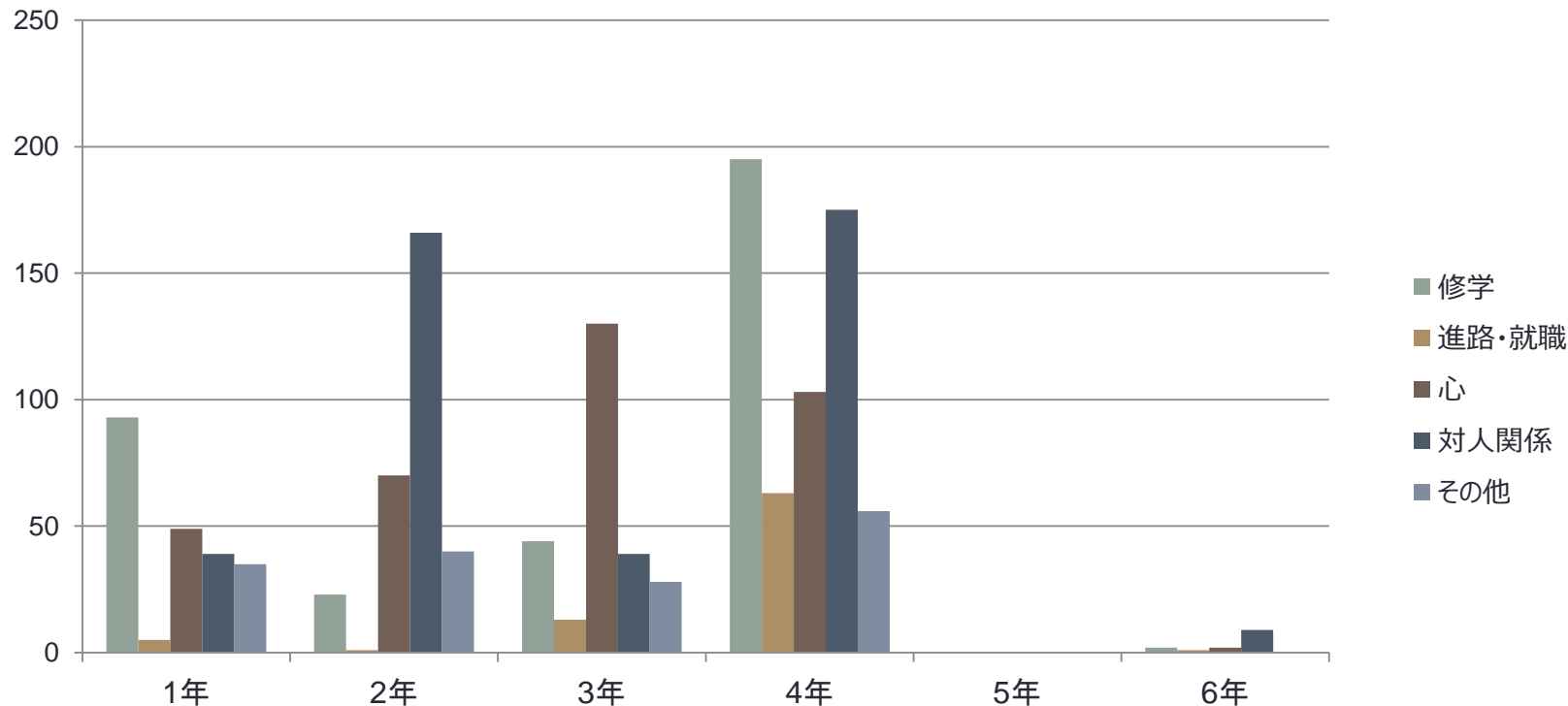
⇐ 学生の適応プロセス／不適応の様相に相違

⇒ 望ましい支援体制も若干変わってくる

(基本はもちろん普遍・不変・・・)

Ⅱ-① 教育システムと連働する学生相談(千葉大:学部生)

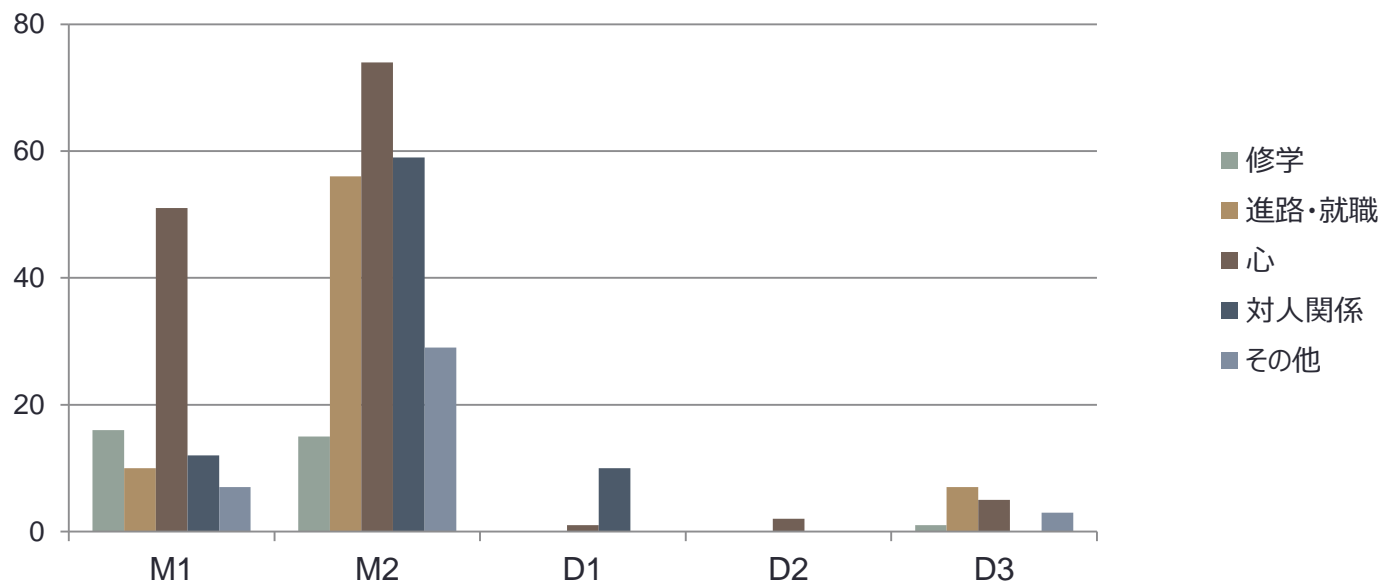
H27年度 <学部> 学年別相談件数 (西千葉キャンパス)



⇒ 学年ごとの件数・内容の相違
～キャンパスの状況を反映しているであろう

Ⅱ-① 教育システムと連働する学生相談(千葉大:大学院生)

H27年度 <大学院> 学年別相談件数 (西千葉キャンパス)



⇒ やはり、教育・研究環境を反映している可能性が高い。

Ⅱ-②「学生生活サイクル」とその時代的変遷

*「学生生活サイクル」の視点・・・ (鶴田,2001等)

～大学生の学年ごとの心理的課題を明らかにし、学年があがるにつれてそれらが変化することに注目して、大学生を理解する視点

⇒「学生期」(≒青年期)の時間や学年に注目する

(別紙資料C)

- * 1)「入学期」
- * 2)「中間期」(模索期)
- * 3)「卒業期」
- * 4)「大学院学生期」

～領域ごとの課題 ⇒ 望ましい関わり&支援体制

(参考:別紙資料D)「論文作成サイクル」

模擬事例①から考えること

1) “入学時の不安”（在学生の声）

“休み時間が寂しくて” “ごはんを1人で食べるのが”

“同じ高校のひとがいなくて” “浪人して周りが年下ばかり”

“話しかけたいけど勇気が出ない” “グループがこわい”

“高校の友だちとばかり遊んでいた…”

2) “どう乗り越えて？”

“早く一緒にいて安心できる友人をと、必死で隣の子に”

“第一印象が大切と、がんばって笑顔で話しかけた”

“自分のために、ひとりでも時間を使えるように”

“あえて知らない世界へ。ゼミやサークルの集まりに”

“有名なコミュニティサイトで事前に入学者の集い”

Ⅱ-③ 「学びのシステム」と学生相談

* 「学びのシステム」の視点・・・ (齋藤,2006,等)

～教育あるいは学習を成り立たせるもの

⇒ 多様な側面の複合体として成立する

(別紙資料D)

* 「内なる学びのシステム」

⇔ * 「外なる学びのシステム」

* 各領域を支援する専門性

⇔ 全体を統合する専門性

(カウンセリングも／学修支援も)

(「研究生活サイクル」においては一層「内」⇔「外」のマッチングが重要)

Ⅲ. 「学生相談」と「修学支援」

～窓口として／目的として(大学への貢献)

Ⅲ-① 「3階層モデル」と様々な「学生支援機能」

Ⅲ-② 「学生相談」と「教育的支援」

(参考)「適応支援教育」と学生相談



Ⅲ-③ 「学生相談」と「修学支援」を結ぶ

～幾つかのシステム例から～

(参考)「学生支援士」と「大学カウンセラー」資格

(参考)「学生支援GP」(循環的学生支援)

Ⅲ-①「3階層モデル」と様々な「学生支援機能」

- *「3階層モデル」 ((独)日本学生支援機構,2007) (別紙資料C)
～「学生相談」=「第3層:専門的學生支援」
「学修支援」=「第1層:日常的」&「第2層:制度化」
⇒ 専門性の確立へ(第3層)

- *「学生支援機能の対象と対応」 (別紙資料E)
(独)日本学生支援機構,2007)

- * 各大学でどのように整備を進めていくか(森野,1993)

- 「分散化」(独立した部署)

- ⇔「集中化」(部門制等でのまとまったセン

- ター)

(各大学の状況と構成員のニーズに沿って決めていく必要)

Ⅲ-② 「学生相談」と「教育的支援」

* 「学生相談」にとって、「修学支援」は必須の側面

⇒ 1) 「学生相談」での「修学支援」的関わり

2) 「学生相談」から「連携」を依頼する

3) 「学生相談」から「教育コミュニティ」へ発信

⇐ 学生対応の最前線での経験と知見をぜひ活用！

(参考) 「適応支援教育(導入教育)の実際」 (別紙資料F)

⇐ 図書館は重要な居場所&学びの場 (齋藤,2007)

* 近年では「障害学生支援」との深い連携

～千葉大での先進的な取組状況

(各大学の状況と各構成員のニーズに沿って、「連働」が広がっていく)

Ⅲ-③「学生相談」と「修学支援」を結ぶもの

～幾つかのシステム例から～

*「学生相談」と「修学支援」の「連携・協働」

1)「基礎教育センター」等の設立

(鬼塚,2013.等)

2)「科目」ごとの「相談室」(部局の教員＋上級生)

(東工大では、教育改革に伴って「学修コンシェルジュ」も)

3)「ピア・サポーター」による学習支援

(早坂,2010,等)

4) 学修に苦勞する学生への「特別クラス」編成

(窪内,2014)

5) 学部付けの「学習相談室」(教員＋Co)

(宇留田・高野,2003 等)

* 千葉大学における「アカデミック・リンク」!

(参考)「学生支援士」資格(日本学生相談学会)

* 5つのちから

～SPS(学生助育/厚生補導)の理念のもと～

- 1) 学生個人へのアセスメント
- 2) 大学環境のアセスメント
- 3) 援助機能
- 4) 大学コミュニティへの働きかけ
- 5) 大学カウンセラーとの連携・協働

↳ ・「全国学生相談研修会」

・実務研修&レポート(1年+α↳スーパーバイズ)

・面接試験

＊「学生支援センター自律支援部門」の発足に際して

⇔ 「学生支援GP」＝平成19年度文部科学省採択（～平成22年度）＝

【目的】

＊本学の教育目標

「国際的リーダーシップを発揮できる創造的人間の育成」のために。

＊“社会性の獲得”“自発性の涵養”をめざし、学生による様々な活動を学内外で展開していく。

【趣旨】

＊「問題解決型」の支援

（カウンセリング等、相談体制の充実）

“学生の来談を待ってから、対処する”

＊「成長促進型」支援を工夫し立案する必要性

“大学から積極的に働きかけるプログラムを提示”

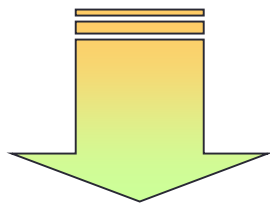
問題解決型

成長促進型

◎3相のことづくり：「事」「言」「異」をキーワードに（共通理念）

*循環型学生支援体制に向けて（学生主体型／教職員協働型）

問題解決型支援
(カウンセリング等)



成長促進型支援
(学生支援GPをベースに)

フィードバック効果

(例)

- *相談に来やすくなる
(カウンセリングが身近に)
- *学生が新しい活動にトライ
(次のステップへ進む)
- *学生の相互支援力を喚起
(友人/知人のことで相談)
- *支援形態を工夫するヒント
(学生の自然な姿/生の声)
- *教職員の意識向上
(学生の潜在力に驚き)
- *学生支援の多様化/充実化
(ネットワークで支える) etc.

<まとめに代えて>

1) 各大学ごとの個別性と共通性

- * 建学理念・学部構成・キャンパス環境・学生像 etc

- ⇒ 成長と学びのプロセス／適応・不適応の様相

2) 「学生相談」の果たす役割

- * 「学生個人」「こころ」に焦点をあてて、学生を支え育てる

- * 「学生相談」から望ましい大学教育について発信

- ⇒ そこには常に「修学支援」の視点が求められる

3) 「学生相談・学生支援」の置かれている現状

- * 重要性の認識は深まるも予算・人員は不足(雇用の安定を)

- * 教育行政・種々の施策・関連学会と連働しながら

- ⇒ 「修学支援」の活性化が、「学生支援」全般にも伝播していく

<文献(書籍を中心に)>

- 1) 『学生相談と連携・協働—教育コミュニティにおける「連働」—』 齋藤憲司, (2015), 学苑社
- 2) 『学生相談シンポジウム—大学カウンセラーが語る実践と研究—』 鶴田和美・齋藤憲司(共編), (2006), 培風館
- 3) 『学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ—』 鶴田和美(編), (2001), 培風館
- 4) 『学生相談ハンドブック』 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会(編), (2010), 学苑社

～その他の関連文献は、1)にて紹介されています。～